

校正のこと

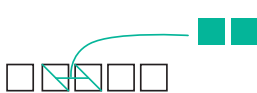
名古屋大学名誉教授 和田 肇

あるとき国際書房の鹿島さんと雑談（もちろん仕事の延長線で）をしていたら、校正の話で盛り上がった。今回は校正の今昔物語を話してみたい。大学の紀要の編集委員をした経験からの愚痴も含まれていることを、あらかじめお断りしておきたい。

校正には二つの役割がある。一つは、文字や文章の間違いを直すことで、もう一つは、文字や文章を削ったり、逆に追加することである。このことは今も昔も異ならない。しかし、その手順や作法を見ると、大きく異なっているようである。それは、植字文化とコンピュータ文化の違いに由来しているように思われる。

校正における著者や出版社の担当者や印刷所との遣り取りは、投手と捕手のサインのように、校正記号を使って行われる。そのために昔は、校正の際に編集者から「校正の仕方」が一緒に渡された（送られてきた）。ここには、文字の取り替え方（は→が）、文字や記号の挿入方法、文中における改行の仕方、逆に改行の取り消し方、行や文字間の開け方や詰め方、文字の前後の入れ替え方、指定位置までの文字の移動などの「校正記号表」が書かれている（インターネットで簡単に入手できる）。校正記号表は今も昔も変わらないようであるが、今ではどういうわけか校正段階でこれが渡されないことがある。

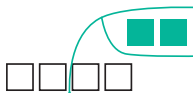
文字の取り替え



文字を前後で交換



文字の挿入



改行



文字を直したりするときには、文書の間近に分かりづらい形で行うのではなく、棒線で紙の余白に引っ張り出し、そこに分かりやすいように書くことも、校正のマナーである。こうした校正作法を知らない若手の研究者が意外と多いことに、驚かされる。メンターとして、きちんと教えなければならないことである。

昔は植字工による植字で組版が作られていたために（癖字で読みにくい人がたくさんいたが—私の知る限りで著名な行政法学者や労働法学者—、流石にプロで間違えなく植字をしていた）、文字が横向きになっていたり、ひっくり返っていたり、あるいは印刷が薄いといった、今では考えられないような「誤植」があったが、そのための校正記号がある。

転倒文字の修正



不良文字の修正



次に、校正段階で文字や文章を修正することは仕方がないが、昔はそれを最小限に留めることをうるさいほどに言われた。組版に大きく変更を迫るような修正は御法度である。そのため原稿を提出する段階で、丁寧に推敲を重ねた。ところが、今は比較的修正が容易なコンピュータで組版を作ることに甘えてか、校正段階で大幅に修正を加える研究者が結構いる。しかし、大きな修正が出ると、その分手間もかかり、間違いも多くなり、出版に大きな影響が出る。そんなことにお構いない人は、研究者のイロハをきちんと指導されていないことになる。

若い頃に出版社のある編集者から、指定された文字数をきちんと守り、校正段階でほとんど手を入れない研究者がいるとの話を聞いたことがある。今も新聞のコラムを書く人は、そのことをきちんと守って文章力を鍛えている。

どうも手書きの時代の方が、丁寧に文書を推敲する傾向があったようである。かつての文豪の手書き原稿などが公開されることがあるが、吹き出しなどを作り、何回も推敲されている跡が窺える。コンピュータ文化が、人間の思考力を墮落させていないと良いのであるが。